

平成10年(1998)1月10日・2月5日・2月19日

会場: 住宅生産振興財団

設計演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

連 健夫
二瓶 正史

1. 現地調査(下谷、根岸)
2. 「パナキュラー読み取り図」と「計画コンセプト図」のグループ発表
3. 「住宅地計画図」のグループ発表

連 健夫 (むらじ たけお)

建築家、連健夫建築研究室主宰、多摩美術大学、東京電機大学非常勤講師。1956年京都市生まれ。多摩美術大学卒業後、東京都立大学大学院修士課程修了。62年より巴里建築工務建築設計部に10年間勤務。91年に渡英、AAスクールに学び、AA大学院修士学位取得。94~96年同校助手、東ロンドン大学非常勤講師。在英日本大使館技術顧問。96年3月に帰国。連健夫建築研究室を設立し現在に至る。

専攻: 住宅と都市、設計教育、学校建築。作品にHIS (UK) Ltd. 著書に「イギリス色の街」、技術堂などがある。

二瓶 正史 (にへい まさぶみ)

P27参照



正面左が連氏、右が二瓶氏

演習課題の狙いとプロセス

連 健夫

まちなみ大学における設計演習の位置づけは、講義内容から学んだ知見を具体的な設計に生かす意味合いと、受講生が聞き手という受け身のかたちではなく、自ら調査してプロポーザルを行なうという能動的で創造的な訓練をする機会と位置づけられる。設計行為には、ないところから何かを生み出すという主観的創造力とアイデアを具現化するという客観的知識が要求されるが、この能力、すなわち建築知識を下地にした提案力を育てるためには、講義形式より、むしろ講師と受講者のキャッチボールのある演習が適していると考えられる。このため、今回の設計演習は、実態調査とその分析、プロセスの知見から提案を行なうというプロセスの中でもその見方や分析方法、デザインの手法などを体得するプログラムを設定した。

課題については、日頃の設計業務のなかで忘れがちな大切なもの、日頃の業務ではチャレンジできないものとして、「パナキユラーからの現代化・地域性の読み取りと応用」とした。この問題意識として、近年の住宅地計画が、標準的手法だけに頼ってしまい、結果として、どの地域においても同じような街並みが形成されているという点がある。そこで、土着の味、すなわち歴史や文化、空間や人情といったその地域、その場所が持っている何らかの特徴を見直し、それを新たな住宅地計画に生かすことにより、より個性的で地域の特徴を生かした住宅地が生まれるのではないかとという問題設定である。つまりパナキユラー（風土、土着性）が感じ取れる街並み形成の提案である。

そこで、この設計演習は、まず下谷根岸という江戸・東京の昔ながらの街並みや生活が現代においても、しっかりと息づいている地域を訪れ、建物、街路、店、人柄、コミュニティ、空間的なもの、社会的なものを観察し、気がついたことを調べ、その特徴を読み取るという調査、分析を行なうこととした。そして、そこで得られた示唆を郊外の課題敷地において、住宅地計画として応用（変換）することが、この課題の狙いである。

具体的なプロセスとして、

1 パナキユラーの読み取り（調査分析）

下谷・根岸地域を実際を訪れ、最初は講師と共に歩き回り、後は3人ずつのグループで自主的調査を行なった。写真撮影、

スケッチ、写真、インタビュー、パンフレットやビラの収集、食事や購入など気になったことを手がかりに、各グループ思い思いに調査が行なわれた。各グループごとに特徴のある調査内容で、あるグループは昔ながらの銭湯に興味があり、実際に入浴をして地域における共同浴場の意味を考察していた。あるグループは町屋の狭い小路の生活に興味を持った。寺や神社、七福神を調査したグループもいた。まんじゅう屋やせんべい屋に興味を持ち、食べ歩きをしているグループなど多様で興味深い調査が行なわれた。夕食会を兼ねて、各グループの調査概要の発表会を行なったが多彩であり、また各人の興味に従って楽しく調査が行なわれたことが伺えた。

3週間後の発表に向けて、各グループごとに連絡を取り合い、集めた資料や写真などを用いて、「パナキユラー読み取り図」としてA1サイズにまとめる。読み取ってみると同じグループ内でも各自の興味は異なり、相違点も多かった。議論が行なわれたようである。

2 設計への応用（プロポーザル）

読み取りから得られた示唆を生かして、課題敷地（A:ガーデン54 または B:八王子まちなみ野シティ、いずれか選択）において、住宅地計画のプロポーザルを行なう。その条件として計画住戸数は40戸〜60戸程度、敷地の3%以上の街区公園を設けることとした。そして「計画コンセプト図」と「住宅地計画図」としてA1サイズでプロポーザルをまとめることとした。

「計画コンセプト図」には、計画主旨、コンセプトをダイアグラム、写真やイラスト等でビジュアルに分かりやすく表現して置き、

「住宅地計画図」には、計画内容説明文、配置図、イラスト等を用いて、計画が具体的にわかるようにまとめることとし、表現方法は自由とした。

この段階でも、グループ内で喧嘩やガガガの議論があったようで、どこまで降り下げれば、具体的な提案に結びつくかなど、各人の建築観がきき出しにアイデアを戦わせたようである。

3 設計演習「パナキユラー読み取り図」と「計画コンセプト図」をグループで発表し、われわれ講師からは講師・アドバイスを

行なった。各グループそれぞれ特徴があり、魅力的な発表が行なわれた。さすが、日頃実務でたたきあげられている受講生たちであり、発表は全体的に質が高く、引きつけられるプレゼンテーショ

ンが多かった。初心者の方々にありがちな写真と説明文が貼られた説明的なものだけではなく、実際に集めたパンフレットや石鹸などの「実物」を貼っているものなど変化に富んだ表現も見られた。

発表と調評のみならず、他のグループからも意見を求めた。このことにより、どのようにパナキユラーを読み取ったか、そこから何を提案できるかを質問より発表する体験と同時に質疑応答の権利を答える訓練ができた。また、次のステップに向けた提案に関するアドバイスを得ることもあった。

4 設計演習「住居の発表から2週間後」

「住宅地計画図」の発表を行なった。この間に、グループ間で連絡を取り合い、ディスカッションを行なう具体的な住宅地としての計画案をまとめるわけである。講師のアドバイスの多さは、内容が深まる意味で、より困難で高いハードルを与えるものであり、それを克服する中でひたひたの案としてまとめているのがかなりハード作業となる。この作業のなかで、具体的な案へ変換の手法、新たなものを生み出すという創造的な設計プロセスを体験して頂いたものと推察する。

各グループの案は、住宅地の中にコミュニティの核としての共同浴場の提案があるかと思えば、門をセジュールにした住宅タイプを提案したもの、オズの魔法使いのストーリーをコンセプトに住宅地の中に河を流し物語性のある住宅地を提案したもの、2階ベランダをルーフ状に繋ぎコミュニティ形成を促したもの、などなどダイナミックでありながら、現実的に何が必要かと思われる魅力的な案が多く見受けられ、講師であるわれわれも刺激を受けた。各グループごとにプレゼンテーションをするなかで、併せて他のグループの案に対して質問をしていた。この質疑のなかで、案の読取りと質を確認することになり、また住宅地計画に関わるさまざまな議論に話が及ぶこととなり、意味深いディスカッションに恋つたと感じている。

こういった実態調査を得た設計演習はワークショップとも呼び、私が以前に勤めたAAスクールや東ロンドン大学でよく行なわれているが、一般教員に受講生のみならず講師もかなりハードな内容になる。しかしながら、各プロジェクトを深く掘り下げることにあり、結果として出てくる調査分析、提案などは極めて深く、学点が多い。また、受講生からも「ハードだけれど面白かった」というポジティブ

な反応が多く、ある程度満足は得られる体験をして頂いたものと思う。作品の質については、評価軸によってさまざまになると思われるが、大切なのは、この体験を通じて、各人が住宅地計画について改めて根本的に考え直す機会となったか否かであると思う。

1月10日下谷・根岸を歩く

二瓶正史

設計演習の方針と課題の打ち合わせのときに、通講師からAAスクールで行なっている設計プロセスを参考にして、どこか東京のドメスティックな地域を歩いて、そこから得たものを設計に反映するという設計演習のやり方かどうかという提案があった。それならば、私が学生時代に陣内秀信教授を中心に調査した台東区の下谷・根岸がよいだろうということになった。そのときの調査結果は「東京の町を読む」(相模原書房)として出版されており、それを副読本にして、まだ正月気分が抜けきれない頭で、まちなみ大学の受講生たちと久しぶりに下谷・根岸を歩くことになった。

下谷・根岸の概要を少々お伝えしよう。

この辺りは町の風景の移り変わりが早い東京では奇跡的に明治、大正、昭和と歴史の連続性を視覚的に感じることできる町である。震災と戦災を免れたところには、昔のままの建築が残っており、また大きな都市開発もなく時代と共にゆっくり変わってきた町は、道や敷地割などが現在にも生きているのである。当然、人々の生活や近所付き合いのあり方も昔ながらのものが継承されており、今でも伝統的な商売で生活を行ない、地域社会に生きている人たちも多い。

下谷は金杉通り(奥州東街道)沿いに江戸時代には市街地化されていた町人地である。ここには通り沿いに町家が並び、その奥に路地沿いに長屋が並ぶというかたちで町ができていく。今でも明治から昭和初期までの歴史的な形式の町家を見ることができ、また通りから路地に入ると、両側に長屋が残っているところもある。

一方、根岸は江戸時代には寺地あるいは屋敷地で明治以降都市化が起ころ、郊外住宅地として町が発展してきたところである。ここは「根岸の黒い花びら住まい」という言葉からも想像できるように、多くの文化人や風流を好む人々が町を構え

たところであり、今でもそこかしこに小規模な洋風な住宅や屋敷が見られる。

じつは私も下谷・根岸を訪れるのは10年以上の年月が経っている。受講生たちの手帳帳をいはいけないと、通講師に付き合ってもらって、集合時間前に一度回っておこうと、朝から記憶をたどりながら町を歩いてみた。私たちが調査したのは今から約20年前のことである。そのとき調査した町は、その後の時間の流れのなかで、大きく変わっているのではないかと不安があったとくにバブル経済のもとに多くの東京の町の様相が変わったことから想像しても、下谷・根岸も大きく変わっているのではないかと想像された。

しかし、昔書いた本を片手に、記憶をたどり地域を歩いた結果、他の東京の地域に比べ極端な変化がなかったことに安心した。特に下谷地区では20年前と同じように町家や長屋が存在し、しかもそこでの販売も以前と同じように賑々と続いていたのは、この地域の人たちの日々の生活の確固たる強さを感じた。さすがに住宅地である根岸は地上げの後として、所々に屋敷が取り壊された跡地の駐車場が目立っていたが、大きな開発による町の破壊は起きていなかった。バブルという荒波に飲まれなかったこの地域の強さに感服して下見を終え、久しぶりに入った洋食屋さんで昔と変わらぬおいしい料理を食べた後、集合場所に引き返した。

まちなみ大学の受講生たちに簡単に地域の概要を説明して、最初はみんな各時代の典型的な建物を見ながら町を歩いた。この段階はまだお勉強の域を出ず、みんな大人しく建築や町の構造を理解すべく一通り歩いた後、グループごとに発

見を求めて解散となり、各グループそれぞれがいきいきとして、町を巡って行った。さて夜は根岸の「夜の町」にて、各グループの発見の成果を聞くために再集まった。地域の住民とすっかり話し込んでいた者、この地域の名物の七福神めぐりをしていた者、名物を食い歩いてきた者、なぜか鉄道に入っただけのんびりしていた者まで現われて、それぞれの発見話に花が咲いた。

そこは郊外の新興住宅地と違い、一語興ではいかない奥の深さ、発見が尽きない町の面白さ、町とはこんなに多様で豊かであったのかと、各人改めて気づいた次第であった。それぞれのグループが発見したものをどのように設計に結びつけていけるか、期待と共にその日はお開きとなった。



根岸



下谷